

★吉野弘 略年譜／1959年までを主に。

1926 (大正 15 年) 山形県酒田市生まれ (1 月)。

参考生年：鮎川信夫 (20 年)、清岡卓行 (22 年)、田村隆一 (23 年)、吉本隆明 (24 年)、茨木のり子 (26 年)、中村稔 (27 年)、新川和江 (29 年)、川崎洋 (30 年)、大岡信 (31 年)

1938 (昭和 13 年) 酒田市琢成第二尋常小学校 (参考 1) を総代で卒業。(タケイ?)

1942 (昭和 17 年) 酒田市立酒田商業高校を戦時繰上卒業 (12 月)。

1943 (昭和 18 年) 帝国石油に入社。

1944 (昭和 19 年) 徴兵検査に乙種合格 (視力不足のため) (日本最後の徴兵検査)。
時期不明ながら、この年、高村光太郎『道程』に感銘を受ける。

1945 (昭和 20 年) 入営直前に敗戦。

1949 (24 年) 職場の労組専従で、過労により倒れ、結核で入院 (三年間)。

1950 (25 年) 東京小岩の片山病院にて、詩人富岡啓二と出会い、詩作開始。

1952 (27 年) 詩誌「罨」に参加。「詩学」投稿開始。

「I was born」(「詩学」11 月、投稿二作目) (『消息』)

当時の「詩学」選者は、鮎川信夫、小林善雄、嵯峨信之、木原孝一、長江道太郎 (合評制)

1953 (28 年) 川崎洋・茨木のり子が談合し「權」を企画する (3 月 29 日)

詩誌「權」に参加。(3 号から)

「犬とサラリーマン」(「權」3) (『幻・方法』)

「火葬場にて」(「權」4)

「記録」(「詩学」10 月) (『消息』)

1954 (29 年) 「散策路上」(「權」5)

「burst」(「權」6) (『消息』)

「星」(「詩学」4 月、初出時の題は「星とサラリーマン」) (『幻・方法』)

「謀反」(「權」7) (『消息』)

「父」(「權」8) (『消息』)

「滅私奉公」(「權」9) (『消息』)

「初めての児に」(「詩学」11 月) (『消息』)

1955 (30 年) 「さよなら」(「權」10) (『消息』)

「私心は」(「權」10)

「挨拶」(「權」11) (『消息』)

「奈々子に」(「詩人部落」35) (『消息』)

「日々を慰安が」(「現代詩」9 月) (『消息』)

「雲と空と」(「罨」27、初出時の題は「雲と空の抒情」) (『消息』)

1956 (31 年) 「亡き K に」(「罨」28) (『消息』)

「刃」(「詩学」3 月) (『消息』)

「冬の海」(「詩学」3 月) (『消息』)

「君も」(「現代詩」8 月) (『消息』)

「雪の日に」(「詩学」10 月) (『消息』)

- 1957 (32年) 「かたつむり」 (「サンデー庄内」2月24日) (『消息』)
「美貌と心と」 (「現代詩」2月) (『消息』)
「身も心も」 (「現代詩」2月) (『消息』)
「何もすることがないとき」 (「硯」37) (『消息』)
詩集『消息』(硯詩の会) 5月1日
「モノローグ」、「ひとに」、「樹木は」を書きおろし (『消息』)
詩集『消息』の合評会(於、茨木のり子宅)同人外で、黒田三郎参加
吉野弘は不参加。(当時は酒田市在住)
「岩が」 (「緑館」18) (『幻・方法』)
「山が」 (「硯」41) (『幻・方法』)
「フランシス・ジャム先生」 (「麦」2) (『幻・方法』)
「幻・方法」 (「詩学」11月) (『幻・方法』)
「權」第一次、解散(12月15日、於、友竹辰宅)1965年再開時、吉野も参加。
- 解散の理由は「同人はそれぞれ皆、個人の仕事へと比重が変わってきた。グループ単位
でしか物の見れない、昨今の怠惰な風潮にも一発くらわせたく」(川崎洋の書簡より)。
吉野弘も解散式に参加。初めて他の同人に会う。
(当時は、帝国石油の勤務のため新潟県柏崎在住)
- 1958 (33年) 「冬の陽ざしの」 (「文學界」2月) (『幻・方法』)
「工場」 (「詩学」3月) (『幻・方法』)
「音楽」 (「現代詩」6月) (『幻・方法』)
「何を作った」 (「ユリイカ」6月) (『幻・方法』)
「夕焼け」 (「種子」3) (『幻・方法』)
「夏の夜の子守歌」(「季節」12、初出時の題は「夜の子守歌」) (『幻・方法』)
「山高帽」 (「今日」10) (『幻・方法』)
- 1959 (34年) 「たそがれ」 (「詩学」1月) (『幻・方法』)
「小さな旅」 (「現代詩」1月) (『幻・方法』)
「ハミング」 (「現代詩」3月) (『幻・方法』)
詩集『幻・方法』(飯塚書店) 6月15日
- 1962 (37年) 帝国石油退社し、コピーライターになる。

注記・・・詩作品は、詩集収録作と「權」発表作を記載した。

参考1・・・玉(たま)琢(みが)かざれば器(うつわ)を成(な)さず【玉琢かざれば器を成さず】

《「礼記」学記から》生まれつきすぐれた才能を有していても、学問や修養を積まなければ立派な人間になることはできない。「礼記」とは、周漢代の儒学の礼に関する書物。